

歴史修正主義と闘うジャーナリスト

私は「捏造記者」ではない

植村隆さん講演会に寄せて

植村裁判を支える市民の会事務局 林 秀起

25年前に書いた従軍慰安婦の記事に「ねつ造」のレッテルを張られ、陰湿で執拗なネット攻撃を受けてきた元朝日新聞記者の植村隆さん(58)の戦いが、新しい局面を迎えています。8月20日に開かれる講演会に向けて、これまでの経過を報告し、一層のご支援をお願いする次第です。

植村裁判を支える市民の会

植村さんが昨年1月に東京地裁に起こした名誉棄損訴訟は、8月3日の口頭弁論で6回を数えます。被告は西岡力・東京基督教大学教授と文藝春秋社。またジャーナリストを名乗る桜井よしこ氏と新潮社など出版3社を札幌地裁に訴えた裁判は、7月29日が3回目です。

2つの裁判の提訴時期は1カ月違いですが、桜井氏側は当事者が東京に集中していることなどを理由に東京地裁に移管するよう主張。最高裁まで持ち込まれて審理の開始は4月22日、東京より1年遅れてしまいました。



「私は日本軍の従軍慰安婦だった」と25年前、韓国人のおばあさん＝金学順(キムハクスン)さん＝が初めて名乗り出ました。支援団体が金さんから聞き取り調査した録音テープをもとに、植村さんが記事にしましたが、西岡氏、桜井氏はこれを「ねつ造記事」と非難。札幌市の北星学園大学で非常勤講師をしている植村さ

んに対し、桜井氏は「学生に教える資格があるのか」と人格攻撃もしてきました。

右派メディアは2014年以降、2氏の言説を中心に、朝日新聞と植村さんへの攻撃を繰り返してきました。これとは別に、インターネットを使った植村さんや大学への攻撃は「売国奴」「国賊」「非国民」「植村を辞めさせないと学生を痛めつけてやる」とエスカレートしていききました。

植村さんの長女の実名をあげて「必ず殺す、何年かかっても殺す。何処へ逃げても殺す。絶対にコロス」という殺害予告もありました。14年春以降、この問題で大学に届いたメールは約3100通になります。

新聞記者や研究者にとって「ねつ造」の烙印は死刑宣告であり、所属する組織の処分を覚悟しなければなりません。その分野で生きていくことはできないことを意味する、極めて重大な事態です。しかし今回の裁判の中で被告らは、ねつ造という表現は「論評だ」と主張しています。ねつ造という表現は、証拠によって証明する「事実を適示したもの」ではなく、意見の表明であって憲法で保障された「表現の自由」の範囲だ、という理屈です。

法廷では今後、被告らの言説が「事実の適示か」「論評か」を中心に緻密な法律論争が展開していくと思われます。

従軍慰安婦は、戦争によって女性の尊厳、人権が踏みみにじられた歴史的事実です。慰安婦問題が国際的に関心を集めているのは、強制性の有無とか、軍関与の資料があるかないかというレベルのものではありません。

名乗り出た元慰安婦のおばあさんについて産経新聞、読売新聞を含む新聞は、いずれも「強制連行」されたと書いています。植村さんは「だまされて慰安婦にされ、200～300人の部隊がいる中国南部の慰安所に連れていかれた」とおばあさんが言ったことを記し、強制連行とは書いていません。

植村バッシングの一番の問題は、書いていない植村さんを「書いた」ことにしたこと、そして植村さんだけを標的にして集中的に攻撃したことです。それはリベラルなジャーナリズムに無言の圧力となり、委縮させていきます。

ねつ造記者、ねつ造記事の悪罵を投げつけるのは歴史を書き換え、「従軍慰安婦はなかった」ことにし、美しい日本であったことにしたい、どす黒い意志を感じます。植村バッシングは、日本のゆがんだ言論状況を示すも

のと受け止められています。

NGO 国境なき記者団は毎年発表する言論の自由度で、2016年度の日本を世界180カ国の72位にランクしました。

国連人権理事会が任命した特別報告者で「表現の自由」を担当するデビッド・ケイ氏(米国カリフォルニア大学バークレー校教授)は4月に来日、メディア関係者からヒアリングし植村さんも事情を聞かれました。会うなり氏は「あなたのことは聞いている」と言われました。

デビッド教授は離日前、外国特派員協会で記者会見し、暫定報告をしました。慰安婦問題を含め歴史的問題は、中学日本史の教科書で十分な議論がなされていないこと。教科書検定制度に政治からの干渉を阻む仕組みがなく、政治的な影響力が及んでいると指摘しました。「慰安婦は恥ずべき歴史だが、事実を適切に反映して教科書をつくるべきだ」と話しました。国連人権理事会への最終報告は来年の予定。



植村さんは今春、北星学園大の非常勤講師を終え、3月から韓国カトリック大学客員教授となりました。医学部などもある総合大学で、文科系が集まる聖心キャンパスの教養課程で「東アジアの平和と文化」を韓国語で教えています。学生は36人。うち7人は日本からの留学生です。授業(3コマ)は週1日に集中し、東京と札幌の裁判日程にぶつからないようにしています。

2月に岩波書店が出版した手記『真実 私は「捏造記者」ではない』がハンゲルに翻訳され、秋にも出版されることになりました。

植村裁判は名誉棄損訴訟ですが、単に植村さんの名誉回復を求めるものではありません。

報道・表現の自由、学問の自由、歴史の事実、日本の民主主義を守るための闘いであります。

植村裁判を支える市民の会は、裁判の訴状や準備書面、陳述書、口頭弁論 各回の傍聴記、開廷のつど

開く報告集会の内容などを収めた

■植村裁判資料室

<https://sites.google.com/site/uemuraarchives/>

■支える会公式ブログ

<http://sasaerukai.blogspot.jp/>

を開設しています。

またメールマガジンを立ち上げる準備を鋭意進めています。

どうぞ名古屋から資料室、ブログをのぞいたりして、植村裁判に注目していただくことを期待しています。

歴史修正主義と闘うジャーナリストの報告
プロフィール
うえむら たかし
韓国カトリック大学客員教授、元北星学園大非常勤講師、元朝日新聞記者、1958年、高知県生まれ、早大政経学部卒。82年、朝日新聞入社。テヘラン、ソウル、北京の特派員を歴任。北海道支社報道部次長、面談支局長など道内でも勤務。2014年に早期退職。著書に『真実 私は「捏造記者」ではない』(岩波書店)、共著に『新聞と戦争』(朝日新聞出版)など。

異常なまでの朝日ハシンの歴史的にされた元朝日新聞記者・植村隆さん。韓国の団体が元慰安婦への聞き取りを始めたという一九九一年の記事を巡って、櫻井よしこさんら歴史修正主義者が「捏造」記者と名指された攻撃は、ネットで拡散され、非常勤講師を勤める北星学園大学にも及び、さらに何者かが、彼を「殺す」という脅迫状まで送りつけてきた。

家族、大学を守り、真実を伝える植村さんは、東京と札幌で二つの名誉毀損裁判を起している。なぜ彼は狙われたのか、不当なハシングと闘う植村さんが報告する。

2016. 8/20 土 開場 13:10 開演 13:30
名古屋市博物館 企画講座
愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1 TEL.052-853-2655
【名古屋駅から】地下鉄有線通で16分「桜山」下車、4番出口から徒歩5分
【金山駅方面から】地下鉄有線通(金山川)で12分「新瑞穂」乗換、徒歩通で9分「桜山」下車、4番出口から徒歩5分
【栄駅から】地下鉄東山線7分「今池」乗換、徒歩通で7分「桜山」下車、4番出口から徒歩5分
【名古屋市営バス】東26系統で30分「博物館」下車

参加費 800円
主催 植村裁判支援名古屋集会実行委員会
NPO法人三千聖議道 不戦へのネットワーク
名古屋三聖・女子勤労挺身隊裁判を支援する会
旧日本軍による性的被害女性を支援する会
日本聖公会中部教区社会福祉部 ATTAC東海
日本ジャーナリスト会議東海
「韓国併合100年」東海行動実行委員会

連絡先 090-2922-5767